

# 斜里市街地における街並みの変遷

— あわせて商工業盛衰のあとをさぐる —

金 喜多一

斜里町文化財調査委員

## はじめに

斜里町における開発の歴史は古く、遠く寛政3年(1791)の昔にさかのぼる。当時、蝦夷地を支配していた松前藩では、「斜里場所」を開いて、斜里前浜に運上屋を設置、交易漁場として沿岸漁業の開発に着手したのがはじまりである。しかし、場所内の漁業と交易を請負い実際の経営に当たったのは、松前の人・村山伝兵衛(3代目)と峯藤野喜兵衛(以下藤野家と略記)とであり、とくに藤野家による経営は、文化5年(1808)から明治20年代に至る約80年の長期におよんだ。したがって、草創時代における斜里の開発は、全く藤野家によっておこなわれたといっているののである。

明治2年(1869)北海道開拓使の設置にともない、当地は北見国斜里郡斜里村と称され、同12年に斜里外4ヵ村戸長役場の設置をみ、当時藤野家斜里支配人であった川端又三郎が初代戸長に任ぜられ、行政の第一歩をふみだした。

ところでこのころの市街地は、斜里川河口に位置する前浜(現在の通称下町)に形成されていた。当時のめぼしい建物は、峯藤野事務所・郵便局(明治9年開局) 駅通所などで、ほかに古くからある藤野漁場の番屋・倉庫・使用人住宅などあわせて10数棟が浜沿えに立ちならび、あとはアイヌの草家が2・30戸斜里川の両岸に散在しているだけの集落に過ぎなかった。

その後明治19年にいたり根室道路、同24年に釧路道路の開通などで、このころから漸く移民の来住をみたが、それでもまだ定着する人は少く、明治20年代までの斜里は、戸数100戸に満たない最果ての漁村だったのである。

ところが、明治30年代に入ると、斜里内陸地帯の植民地解放と海上定期航路が開かれたことなどから、農業移民の団体移住が相次ぎ内陸地帯の開発は著しく促進された。また、この動きにつれて木材業がおこり、明治末期から大正期にかけ、最

高頂に達したが、この勢に拍車をかけたのが第1次世界大戦勃発による雑穀景気(大正5~7年)の到来であった。斜里でもこのころ、農家や商人のいわゆる成金が続出し、下町市街地の全盛時代を現出した。

こうして大正時代に入った斜里は、農林業を主産業として大きく発展し、大正6年には電燈、同9年には電話の開通をみ、そして14年には村民待望の鉄道が開通(斜里~網走)して、村の総人口も13,000人を突破する躍進をとげたのである。

しかし、この鉄道開通を契機として、斜里市街の街並みは、その後下町から駅のある上町へと大きく移動し、やがて駅前通りを中心に商店街・住宅街が形成されたのである。したがって、大正時代繁華をきわめた下町市街地は、その後年々衰退の一途をたどるのであった。

今ここに、斜里市街地における街並み変せんの跡をさぐり、これを図上に復元してみよう。

## 1. 斜里場所時代(1791~1869)

斜里市街最初の写生図は、斜里場所時代の寛政10年(1798)当地方を巡視した幕吏・谷口青山によって描かれている。この絵は現在、函館図書館に保存されていて、すでに斜里町史をはじめ、その他の史書にも掲載されているが、れい明期における斜里市街の風景を実によく描いており、いまみてもその正確度は高い。



図1. 寛政10年(1798)の斜里(谷口青山筆・斜里最古の写生図)

図1にみるように、山の手には最初の場所請負人・村山伝兵衛の寄進した斜里神社（弁天堂）と鳥居があり、その下方の前浜には運上屋と漁場の番屋・倉庫などが立ち並び、その東方の海岸沿えに、アイヌの草家がコタンを形成している。

斜里川の流れも、市街地の東方へ大きく蛇行しオホーツク海へ注いでいる。当時は港の設備がなかったため、この斜里川の河口が港の役割を果たしていたのである。

なお、この時代に描かれた斜里市街の風景図はこの絵のほか、目賀田帯刀筆・延叙歴検真図（函館図書館蔵）と成石修筆・東徼私筆（函館図書館蔵）がある。

## 2. 明治時代中期（1887～1912）

明治時代の市街図は遺憾ながら残されていないので、その街並を明らかにすることは困難である。しかし、斜里町史図版に掲載されている「明治26年の斜里市街図」（図2）と、知床博物館所蔵の「明治29年の斜里郡旧市街図」（図3）さらに、古老談話なども参考に当時の街並みをさぐってみよう。

図2は、昭和28年ころ当時の古老・小山田市太郎氏が、斜里町史編纂委員会の依頼に応じ、明治の昔を想像しながら描いたもので、このころの市街地はまだ下町だけで、現在の上町（五軒橋から斜里駅までの市街地）は、山坂のはげしい丘陵地だったようである。当時は、茅藤野の漁業がまだ全盛期にあったことから、さすがに茅関係の建物（事務所・番屋・倉庫）の多いのが目立つ。茅以外の建物では、斜里戸長役場・警察署・駅通所・郵便局・小学校・皆月寺（西念寺の前身）・村医（山内）などで、ほかに商店・料理店・旅人宿な

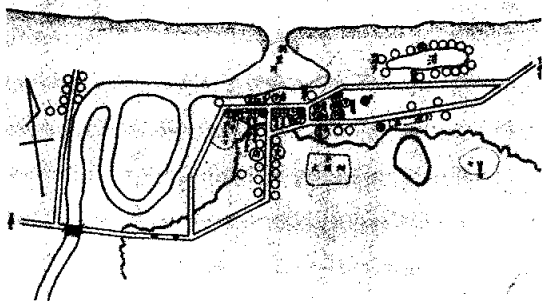


図2. 明治26年の斜里市街（小山田市太郎図）

どあわせて10軒ほどあり、市街地を形成している。また、市街の東端・海岸沿えに沼があって、この沼の周囲に15、6戸の小部落があり、ここにも商店が1軒、料理店が2軒あるのもおもしろい。

一方、網走から斜里に通ずる道路は仮定県道とあって、この道路は下町から、現在以久科原生花園になっている海岸道を通して、根室道路につながっていた。したがって、当時根室方面への通行人はもちろん、朱円や越川方面へ行く人たちも、この道路を歩いたという。

このころ（明治20年～30年初期）下町で商業を営んでいた人々はおよそ次のとおりで、これらの人々がいわゆる斜里商業草分けの人たちだった。

平平田嘉吉商店（米穀荒物雑貨）

①半沢真吉商店（　　〃　　）

〆加藤文治商店（　　〃　　）

〇藤沢純一商店（海産米穀荒物）

標津家・山中万造（料理店業）

川島旅館（旅人宿）

日下部春吉商店（荒物雑貨）

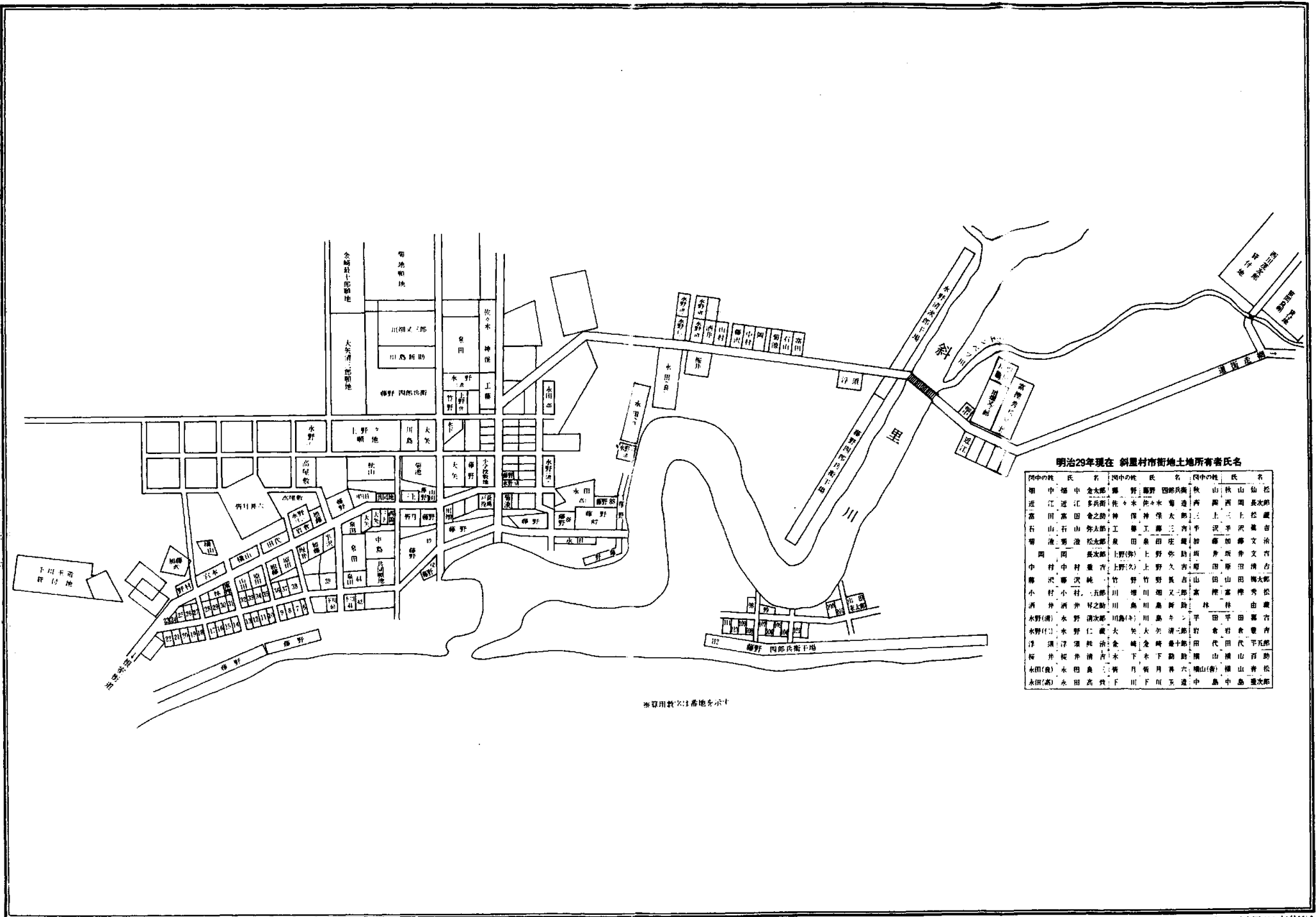
大家安次郎商店（　　〃　　）

こうして明治30年代の後半に入ると、斜里奥地の植民地解放や斜里への定期航路の開設などで、必然的に移住者もふえ、これにつれて商店も増加した。さらに、明治36・7年ころから木材業が勃興し、これに加えてマッチ軸木工場やサケ・マス缶詰工場の操業をみ、やがて大正時代に入ってその全盛期を迎えたのである。

明治末期における商工業者の顔ぶれは表1のとおりである。

おわりに、「明治29年の斜里郡斜里旧市街図」（図3）は、明治29年1月現在における市街地宅地の所有状況を示した図で、この図面のみを限り、当時のめぼしい土地はほとんど茅藤野が独占している感があり、当時の街並形成の過程を知る貴重な資料となっている。

なお、茅藤野に次ぐ土地所有者は、初代戸長を務めた川端又三郎を筆頭に、加藤文治、原田清吉、山田梅太郎（以上藤野関係）。次いで永田一族の永田高致、藤沢純一、永田良三。それに西念寺を創建した皆月善六。漁業関係の泉田庄蔵、坂井文吉、上野久吉、水野清次郎、水野仁蔵など、そのほか下川玉造、半沢真吉、平田嘉吉などが、名を連ねている。



明治29年現在 斜里村市街地土地所有者氏名

田中の姓	氏名	田中の姓	氏名	田中の姓	氏名
畑	中 福	金太郎	藤 野	藤野 四郎兵衛	秋 山 仙
近 江	近 江 多兵衛	花 々 本	花 々 本 菊造	西 岡 長次郎	
高 田	高 田 金之助	神 保	神 保 太郎	上 三 上 松藏	
石 山	石 山 弥太郎	工 藤	工 藤 三 吉	平 沢 平 次郎	
菊 池	菊 池 菊造	松 光	松 光 泉	田 庄 藏	
岡 村	岡 村 長次郎	上 野	上 野 久吉	原 田 原 田 信吉	
藤 沢	藤 沢 次郎	竹 野	竹 野 長吉	山 田 山 田 梅太郎	
小 村	小 村 五郎	川 崎	川 崎 又三郎	林 高 林 由 藏	
清 井	清 井 昇之助	川 崎	川 崎 新助	川 崎 林 由 藏	
水野(清)	水野 清太郎	川 崎	川 崎 金 平	田 平 田 平 吉	
水野(仁)	水野 仁藏	大 矢	大 矢 清三郎	若 倉 若 倉 吉	
浮 須	浮 須 純治	金 崎	金 崎 金 平	田 代 田 代 平五郎	
桜 井	桜 井 清吉	水 下	水 下 勘助	横 山 横 山 善助	
水田(徳)	水田 徳太郎	月 岡	月 岡 六 次	横 山 横 山 善助	
太田(高)	太田 高次郎	下 川	下 川 五 道	中 島 中 島 重次郎	

\*数字用数字は番地を示す

図3. 明治29年の斜里市街図

表1. 明治末期の商店経営者と工場経営者  
商店経営者（明治40年斜里戸長役場文書により作成）

営 業 内 容	経 営 者	営 業 内 容	経 営 者
郵船代理店・呉服・荒物雑貨	平 田 嘉 吉	料理店（標津家）	山 中 万 造
藤野汽船回漕店・海産・米穀・酒	加 藤 文 治	飲食店	金 崎 リ キ
海産・荒物雑貨・酒類卸小売	堺 谷 定次郎	豆腐製造	原 田 寿三郎
海産・農産・荒物雑貨・酒類	吉 野 由太郎	理髪店	津久井 栄 作
米穀・荒物雑貨・海産	藤 沢 純 一	麵製造	古 川 佐 七
米穀・農具・呉服・荒物雑貨卸売小売	半 沢 純	海産・肥料製造（魚粕）	半 沢 真 吉
米穀・酒類・荒物雑貨・缶詰類	日下部 春 吉	〃 〃	小山田 喜久治
酒類・石油・味噌醬油・菓子類	羽 田 直 七	〃 〃	永 田 孝 成
酒類・缶詰・菓子類	猪 足 徳 市	〃 〃	坂 口 浅 平
酒類・缶詰・菓子製造	松 田 タ ツ	〃 〃	久保田 友 吉
味噌醬油・酒類・漬物・菓子紙類	斉 藤 万 吉	〃 〃	富 樫 秀 松
米穀・酒・荒物雑貨	本 間 鉄 藏	〃 〃	泉 田 庄 藏
米穀・荒物雑貨	佐 藤 弥 惣 吉	木材業・土木請負業	有 坂 克 己
酒類・菓子類・雑貨小売	大 家 安次郎	木材業	平 船 甚 松
旅人宿	川 島 新 助	〃	吉 野 由 太 郎
旅人宿・湯屋業	高 橋 亀 太	舁 業	川野名 幸 作
駅通取扱人	下 川 玉 藏	〃	菊 地 松 太 郎
料理店（陽気楼）	鈴 木 マ ツ	運送業	鹿 島 国 松
料理店（玉喜楼）	秋 山 ヨ シ		

工場経営者（明治40年現在）

名 称	所 在 地	経 営 者	創 立	規模その他
山本製軸工場	シマトカリ（峰浜）	山 本 利 輔	明治35年	従業員20人
逢坂 〃	アツカンベツ（以久科）	逢 坂 又 吉	〃	〃 40人
津田 〃	赤上（朱円）	津 田 藤 藏	明治38年	〃 10人程度
田中澱粉工場	アツカンベツ（以久科）	田 中 庄 兵 衛	〃 35年	
石川 〃	〃	石 川 芳 次	〃 40年	
斜里共同缶詰工場	斜里市街下町	和 泉 庄 藏	〃 36年	サケ・マス缶詰



写真1. 明治末期の斜里市街（下町）



写真2. 下町で操業していた斜里共同缶詰工場（明治38年）

### 3. 大正時代 (1912~1926)

大正時代の斜里は、これまでの漁村から農林業のまちへと、大きく躍進した時代であった。すなわち、大正2年には三井農場による5,000町歩の開拓がはじまって、この年から本州の各府県から農家の集団移住が相次ぎ、斜里奥地の開発は非常な勢で促進された。これについて、富士製紙会社でも大正6年から現在の富士部落に農場を開いて、2,000町歩の開拓がはじまった。こうした動きにつれて造材業も活発となり、三井物産をはじめ有力業者、労務者など多数入りこんでさかんに伐採がおこなわれた。

このころ斜里川は、下流の河口から現在の川上部部落のあたりまで流送材で埋められ、斜里前浜の沖合には、これらの木材を積取りする大型貨物船(3,000屯~5,000屯級)の入港でにぎわった。

また、これにあわせて製材工業が盛んになり、大正5年には、市街下町に有坂木工場(有坂克己)が、斜里はじめての製材工場を操業したのを皮切りに、翌6年には梅新木工場、7年には佐藤木工

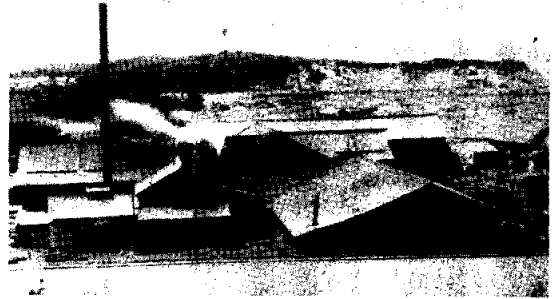


写真5. 有坂木工場風景 (大正5年創業)

場と相次いで操業をみ、斜里はこれまでの原木輸出時代から、林産資源加工時代へと発展していったのである。

さらに、大正5年ころから第1次世界大戦の影響が顕著にあらわれ、未曾有の好景気が到来した。

斜里でもこのころ、青エンドウ・菜豆など輸出用農産物の異常な値上りで、農家や商人の成金が続出し、下町の商店街は好景気にわいた。

ちなみに、このころの青エンドウの価格は、大正3年ころまで、1俵4~5円であったのが、5年



写真3. 木材積取船の入港と下町の一部



写真6. 大正6、7年ころの下町市街



写真4. 斜里川下流の木材置場 (大正6年)



写真7. 三斎藤商店 (大正3年ころ)

には2倍の10円にはね上り、さらに7年になると空前の高値を呼んで18円まで高騰した。

したがって、当時農家の人々は、馬車1台に青エンドウ20俵位をつんで雑穀商人に売渡すと、それだけで360円という、当時の農村では夢のような大金が入ったのである。そのころ、150円くらいで、普通の住宅1軒建てることができ、白米1俵5～6円、また3円もあれば下町の料亭で豪遊できたという時代である。こうした好況は、さらに農家の豆類耕作意欲をあおる結果となって、開拓の手は斜里さい果てのウトロや岩宇別まで延びたのもこの頃だった。

大正7年の統計(斜里村勢一斑)によると、豆類の作付けは青エンドウだけで2,568町歩もあり、総作付反別の実に7割が豆類によって占められている。

この豆景気で、下町の現在、簡易裁判所の附近に金融倉庫、正しくは大斜里運送倉庫株式会社(社長・堺谷定次郎)の赤レンガ造り大型倉庫が3棟もでき、農家や雑穀商の集めた豆類・雑穀・デンプンなどの入出庫で活気があった。また、この倉庫には、船舶により斜里地方に送られてくる米穀・食料雑貨をはじめあらゆる物資、越年物資なども入庫し、流通経済の上に大きな役割を果たした。

ところで、このころの繁華街は、当時の斜里郵便局(現在の寿荘)から旧禅竜寺の附近までで、このあたりが当時の銀座通りで、料理屋、飲食店その他各種商店が軒をつらね、花街を形成していた。料理屋は標津家(山中万造)を筆頭に大小20軒くらいあったようであるが、これらの料理屋を統轄する組織に見番というのがあった。場所は現簡



写真9. 割烹・標津家(大正5年ころ)

裁の前のあたり。

こうして大正時代に入った斜里は、大正6年に斜里電燈株式会社(社長・有坂克己)が設立されて、翌7年に電燈が輝き、そして2年後の9年には電話の開通をみたのである。これよりさき、大正7年には当時道東唯一の地場銀行だった根室銀行が、旧斜里小学校(現在斜里警察署長官舎)のところに支店を設置しており、当時の好況がうかがわれる。このころの人口増加の動きをみると、明治末期(1911)では斜里村の総人口が3,332人に過ぎなかったのが、7年後の大正7年(1918)末では、15,641人と実に5倍に激増している。この激しい増加は斜里はじまって以来のことで、翌8年には現在の小清水地区を分村し、小清水村としている。



写真10. 大正8年ころの役場(玄関は海を向いていた)

一方、当時斜里港への定期航路は、日本郵船の西廻り線(小樽から稚内経由)と東廻り線(函館から根室経由)の二便があり、交互に寄港し、旅



写真8. 大正時代の斜里郵便局(現・寿荘の場所)

客と貨物の輸送を行っていた。このほか、藤野汽船（羊藤野の経営）の交竜丸というのが斜里～網走間の貨物輸送（不定期）をおこなっていたが、その後大正7年から網走の能登船部による発動機船・第5号丸が就航し、斜里～網走間の海上交通機関となった。旅客運賃は大人1円50銭（子供半額）貨物は1個30銭であった。当時も斜里港は遠浅の上、港湾設備のなかったことから、荷役のすべては船業者に委ねられ、本船の停泊する沖合でおこなわれた。

大正の初期、未曾有の好景気をもたらした第一次世界大戦は、その後8年の年に終戦となったが、そのとたんに豆類の暴落がはじまった。例えば大豆はこの年まで1俵16円であったのが、戦後は9円に暴落し、小豆も20円が11円にガタ落ちし、豆類の花形だった青エンドウは、遂に1円50銭まで大暴落した。こうなってはたまったものでなく、豆類偏作の農家は致命的な打撃をうけた。

一方、この雑穀景気に全盛を誇っていた商店街の打撃も大きく、なかには倒産して夜逃げする商店もあったということである。

農村の不況はその後さらに続いたが、朱円や越川の高台地帯では、大正9年以降毎年のように連続風害に襲われ、収穫5分作以下という状態が続いた。このため、土地を捨てて離農・転出する者が続出し、農家の多くは大きな借金を背負い、長年その返済に苦しんだ。

こうしたなかで、大正14年に、村民待望の鉄道（網走～斜里）が開通した。村では、この年盛大な開通祝賀会を開催して、躍進斜里の前途を祝福しあった。

しかし、この鉄道開通を契機に、定期船の入港



写真12. 開通記念の旗行列市街をねり歩く(大正14年)

と貨物船の入港がなくなったことから、斜里市街の様相はその後大きく変化していった。すなわち、市街上町に新しい斜里駅ができると、下町から上町へ移転する商店が続出し、駅前通りを中心に新しい商店街が形成されていったのである。したがって、これまでの下町では商売が成立なくなり、その後年々衰退の一途をたどった。

おわりに、大正時代の市街図（下町を中心に）・諸会社・工場・商店名を掲げ、この時代の結びとする。

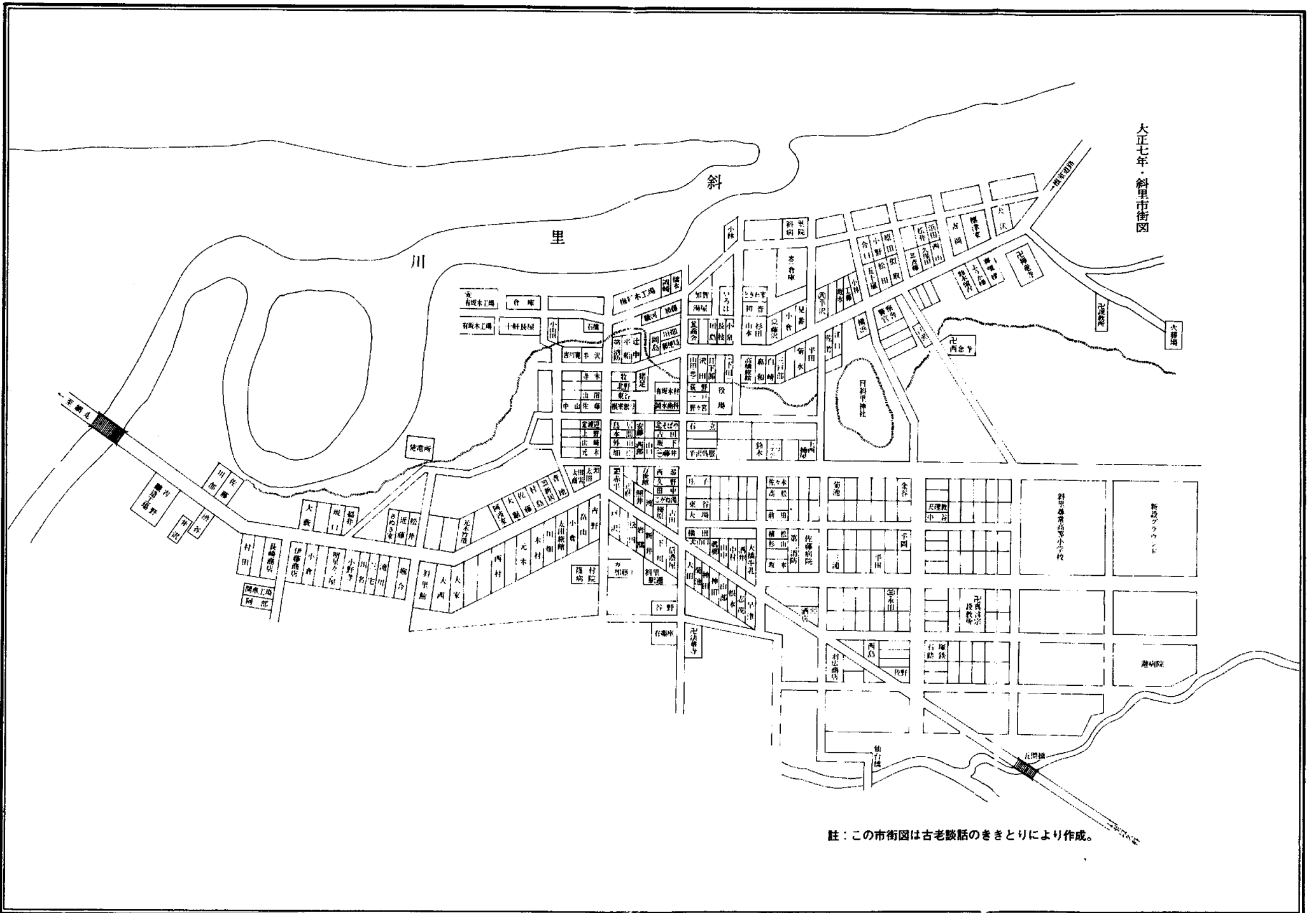
表2. 大正末期の商工業者総数

営業別	軒数	営業別	軒数
物品販売業	262	写真業	3
金銭貸付業	6	仕立業	6
運送業	9	倉庫業	1
土木請負業	16	料理店業	17
木材業	6	飲食店業	21
代弁業	7	酒・味噌・油醸造	4
代書業	4	湯屋業	2
精米業	12	玉突台業	2
製材業	6	劇場業	1
鍛冶業	10	理髪店業	12
桶・車製造業	6	周旋業	1
皮類製造業	4	牛馬商業	25
家具業	2	旅館業	21
印刷業	1		
		合計	467軒

註. 資料は大正14年発行の斜里村勢一斑による。



写真11. 鉄道開通祝賀列車斜里駅到着(大正14年)



大正七年・斜里市街図

註：この市街図は古老談話のききとりにより作成。

図4. 大正7年の斜里市街図



表3. 大正時代設立諸会社と工場

1. 諸会社 其の1 (村内資本によるもの)

名 称	設立年月	事業内容	資本金
斜里電燈株式会社	T・6・10	電灯・電力の供給	50,000円
斜里運送倉庫株式会社	T・7・10	倉庫・運送・回漕業	60,000
㊤株式会社斜里商会	T・7・5	米穀雑貨販売	20,000
㊦醬油醸造株式会社	T・9・2	味噌醬油醸造	15,000
斜里見番株式会社	T・9・8	芸妓営業仲介	20,000
合名会社 十八商会	T・11・11	金銭貸付業	15,000
合資会社 倉浜谷商店	T・12・12	雑貨販売	5,000

諸会社 其の2 (村外資本によるもの)

名 称	支店出張所開設年度	事業内容
三井合名会社斜里農場	T・2	農場開拓
富士製紙KK斜里農場	T・7	〃
根室銀行斜里支店	T・7	銀行業

2. 工場

工場名	所在地	創業年	原動力	従業員	製品
㊧有坂木工場	斜里市街	T・5	蒸気機関95HP	28	建築材・鉛筆材
㊨新居木工場	秋の川	T・9	石油機関10HP	13	鉛筆材
小林木工場	東朱円	T・6	蒸気機関35HP	12	建築材・鉛筆材
佐藤木工場	斜里市街	T・7	〃 13HP	4	鉛筆材
刃梅新木工場	〃	T・6	〃 15HP	7	〃
服部木工場	川上	T・9	水車60HP	10	〃

註. 以上の表は大正14年発行の斜里村勢一斑による。

表4. 大正9年、電話開通時の商工業者

電話番号	加入者名	電話番号	加入者名	電話番号	加入者名
1	株式会社 斜里商会	35	呉服太物 太田芳市	68	雑貨商 赤平庄助
2	呉服商 田端利平	36	割烹 永進亭	69	料理店 五味克郎
3	信濃屋呉服店(清水余太郎)	37	古田鍼力店	70	金物商 山口恒三
5	斜里村役場	38	斜里電氣株式会社	71	割烹いろは 松原憲治
6	根室銀行斜里支店	41	〃	72	雑貨 牧安太郎
9	肉類・雑貨 坂本栄吉	42	斜里警察署	73	有坂木材店
10	呉服商 藤井音吉	43	金融業 植松田之作	74	飲食店 小野寺源太郎
12	㊦醬油醸造合資会社	44	金物商 元木秀三郎	75	斜里館 高桑覚蔵
13	荒物雑貨 長崎金助	46	農具製造 太田松四郎	77	三井農場
14	割烹 永進亭	47	農業 元木善蔵	78	鮮魚 佐々木佐治右門
15	荒物雑貨 齊藤万吉	48	荒物雑貨 伊藤由太郎	79	食料品雑貨 根本周蔵
16	紙・文房具 林喜代三	50	有坂木工場	100	川端喜四郎
17	合資会社 斜里運送社	52	半沢旅館	101	河尻徳三郎(農業)
18	呉服商 藤井音吉	53	永田薬店	102	薬種商 森本菊一
19	食料品 大場竹蔵	54	雑貨商 安川恒男	103	大野安次郎(農業)
21	荒物雑貨 平田伝太郎	55	米穀雑貨 浜谷甚太郎	104	呉服太物 半沢 純
22	外山病院 狩野太八	56	米穀雑貨 山口幸一	106	呉服太物 藤井音吉
23	呉服商 水上富之助	57	旅人宿 太田成盛	107	寺島薬店
25	尾張屋時計店 長谷川泰	58	金物・呉服 鳥居欣四郎	108	医師 佐藤琢三郎
26	米穀雑貨 羽広仁吉	59	斜里村役場	112	商業 太田伊三郎
27	木材業 有坂克己	60	〃	113	飲食店 久野輝夫
28	中村医院 中村善男	61	斜里小学校	117	精米業 高田堅三郎
29	菓子製造 朝日沢一	63	有坂木工場	118	鉛筆材製造 辻弥市郎
30	旅人宿 半沢 亮	64	旅人宿 田中金兵衛	119	仕立物 東谷徳太郎
31	米穀商 山口幸一	65	雑穀商 元木善蔵	120	富士製紙斜里駐勤所
33	米穀雑貨 ㊤商会	66	割烹 標津家	121	永田良三
34	荒物雑貨 佐藤惣八	67	呉服太物 渡辺信太		

註. 斜里電報電話局所蔵の加入者名簿による。

#### 4. 昭和戦前期 (1927~1945)

昭和の初めは、金融恐慌による不景気風が吹きまくり、そのうえ冷害凶作も続いて全道的に不景気であった。

しかし、当時の斜里は農家戸数が全戸数の約6割強を占め、その農産額も村の産業総生産額の7割を占めるなど、純農村として確固不動の地位を確立していたのである。したがって、農業における豊作・凶作のいかんは、村の産業経済にも大きな影響力をもっていた。ところが、昭和に入ってから農業は、これまでの畑作から徐々に水田農業に向けられ、昭和6年には全耕地面積の3分の1に相当する2,700ヘクタールを水田に転換したのである。

ところが、こうして造成した水田からは、昭和8年を除いて6年・7年・9年・10年と四度連続する冷害凶作にあえ、農家の困窮はその頂点に達した。したがって村の経済に与えた影響も大きく、とりわけ農家と取引のあった商店の打撃は深刻なものがあつた。当時の統計(斜里村勢要覧)によると鉄道の開通した大正14年末の商店数は、全村で262軒あつたのが、冷害のひどかった昭和6年には180軒となり、実に82軒も減少している。これは当時の不況がいかに深刻であつたかを物語る数字である。

表5. 斜里村職業別戸数(大正15~昭和13年)  
(斜里村勢要覧)

年 度	農 業	商 業	工 業	漁 業	官公使 会 社 員	労働業	雑 業	合 計
大正15	1,429	371	64	19	135	123	115	2,246
昭和2	1,383	328	64	15	170	159	208	2,327
3	1,419	285	65	17	173	129	43	2,127
4	1,356	278	65	25	171	245	117	2,252
5	1,456	287	64	21	172	278	213	2,491
6	1,483	186	60	20	193	287	182	2,511
7	1,502	305	63	40	190	266	135	2,491
8	1,573	297		24	195		265	2,412
9	1,613	288	61	24	198		285	2,469
10	1,618	290	60	68	201		502	2,739
11	1,655	308	62	46	204		414	2,689
12	1,994	408	87	53	183		282	2,707
13	1,610	540	90	53	202		228	2,724

表6. 斜里村総生産額(大正15~昭和13年)  
(斜里村勢要覧)

年 次	農 産	畜 産	水 産	工 産	林 産	合 計
大正15	634,008	20,071	31,440	417,290	131,483	1,234,292
昭和2	1,251,028	55,897	122,130	353,609	111,350	1,896,164
3	1,206,986	70,224	163,788	323,135	182,343	1,946,470
4	1,113,778	69,062	175,791	311,342	114,684	1,777,204
5	1,095,018	49,539	73,154	199,063	46,759	1,463,533
6	471,366	39,133	116,740	191,113	31,176	849,528
7	398,890	125,357	93,522	381,846	72,316	1,071,931
8	1,714,087	77,261	62,641	127,030	12,472	1,993,491
9	902,752	73,917	311,750	286,818	116,218	1,691,462
10	956,791	88,617	142,343	772,978	102,265	2,062,994
11	1,828,602	99,434	99,166	638,939	58,271	2,723,412
12	1,860,635	95,995	153,005	715,958	69,884	2,895,477
13	2,492,316	156,058	198,871	1,499,138	79,963	4,426,346

表7. 昭和6年の商工業者一覧表(資料、斜里村村勢要覧)

業種区分	年 次		業種区分	年 次	
	大正14年	昭和6年		大正14年	昭和6年
物品販売業	262	180	写真業	3	1
金銭貸付業	6	6	仕立業	6	6
運送業	9	4	倉庫業	1	1
土木請負業	16	15	料理店業	17	7
木材業	6	5	飲食店業	21	19
製材業	6	2	酒・味噌醸造業	4	5
精米業	12	13	湯屋業	2	3
鍛冶業	10	7	玉突台業	2	0
桶・車製造業	6	7	劇場業	1	1
皮類製造業	4	4	理髪店業	12	11
家具商	2	3	周旋業	1	0
印刷業	1	1	牛馬商	25	17
代書業	4	4	旅館業	21	18
代弁業	7	4	合 計	467	345

次に昭和4年に発行された「斜里市街明細図」がのこされているのでこれを掲げる(図5)。この市街図は鉄道開通を記念してこの年発行されたもので、商店街や住宅街などの居住者を一戸一戸明細に記入しており、当時の街並を知る貴重な資料である。

まず道路についてみると、停車場前の大通りを中心にして、西は斜里橋に至る栄町通り(現在港町)と、東は斜里館の角から五軒橋に至る以久科通りが主要道路で、商店街はこの道路の両側に立ち並び中心街を形成している。

一方、大正時代に繁華街だった下町は、鉄道の開通により、定期船や木材積取船の入港もなくなったことから、この時点ではほとんど上町へ移転して、昔の面影がないほど衰退しているのがわかる。

昭和10年の4月に、斜里の市街始まって以来という大火があった。すなわち、4月23日の夕刻、駅前通り 太田盛光商店(現在㊦小泉呉服店附近)から出火した火事は、折からの強風で附近一

帯の商店、住宅など48棟61戸を一夜のうちに焼失した。火災原因は放火とわかったが、この火災で拓銀支店をはじめ太田呉服店から現在の網走信金に至る町内目抜き商店街を焼失したのである。

連続冷害のはじまった昭和6年は、国鉄釧網線が全通(斜里～釧路)し、町民あげて喜びにわいた年であった。

しかし、一方においては、満州事変が勃発し、日本が戦争という暗い谷間にのめりこんだ年でもあった。冷害克服に必死の努力を傾けている間に、戦局はその後日支事変へと拡大し、16年12月には遂に太平洋戦争へ突入した。

こうしたなかで昭和14年から、統制経済時代に入り、15年5月から米穀・石油・石炭・砂糖・マッチなどの切符制が実施され、8月以降の米は通帳制に改められた。こうして商工業に対する重圧はその後益々強まり、17年には企業整備令により小売業者の整理統合が進められ、多数の転廃業者を出したほか、青壮年は軍関係の重要産業部門へ徴用された。



写真13. 昭和4年竣工の斜里村役場庁舎  
(このときから玄関は山を向く、現・町立図書館)

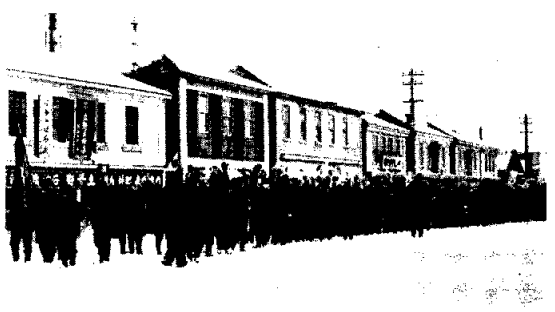


写真15. 大火復興後の駅前通り商店街  
(このときから建物は耐火式のモルタルとなる)



写真14. 昭和10年の大火・駅前大通商店街61戸焼失



写真16. 戦中時の斜里米穀配給所

一方、生活物資もその後、ゴム靴・地下足袋・軍手・衣料品・酒・菓子・ストーブ類・ローソク・食用油・乳製品に至るまで統制品となり、17年には木材、続いて鮮魚介類も対象となって、もはや統制品でない品物はなくなった。したがって商店は、これまでの商店という性格から、国の配給機構の代行機関のようになり、商業としての妙味も機能も一切破壊されてしまったのである。

当時、斜里の指定配給所として残された商店は次表のとおりで、こうして昭和20年8月15日、終戦を迎えたのである。

表8. 戦時中の指定配給所一覧表

1. 雑貨 (酒類含む)	市街5区	滝川 賢
	〃 4区	永出 商店
	〃 3区	宮島 武男(農業会)
	〃 4区	吉野兄弟合資会社
	〃 2区	野尻 正武
	〃 〃	安川 恒男
	〃 〃	坂田 辰雄
	鶴の巣	中村 綱吉
	川上	根本 森造
	中斜里	森 一二
	三井	土橋 伝七
	以久科	本間 清二
	越川	広瀬 澄三
	朱戸	羽田野勘一郎
	知布泊	小山田市太郎
宇登呂	七条 一司	
斜里市街	千葉 清吉	
	斉藤丑之丞(味噌正油)	
2. 呉服	市街4区	元木 正男
	〃	太田 初二
	〃 2区	薬師寺竜夫
	〃	片桐 正一
3. 主食	斜里市街	食糧営団斜里配給所
4. その他	魚屋	小林弁太郎
	〃	根本 周蔵
	〃	福本 春吉
	〃	長栄 永寿
	〃	倉田 俊吉
	〃	高橋 武治
	文具屋	〇林喜代司
	薬屋	永田 勝枝
	〃	森元 菊夫
	〃	寺島 一郎
	〃	日下部久太郎
	肉屋	佐藤 惣八
	〃	清野治三郎
	〃	惣田 清
	時計屋	長谷川 泰
	〃	森野 正義
	〃	佐々木武男
	菓子屋	古田 沢一(斜里製菓報国会配給所)

註. 本表は斜里町史による

### おわりに

斜里市街地発展の歴史を物語る街並みの変遷について、昭和53年頃から調査を進めてきたが、古い時代(明治~大正期)の必要資料は殆んど散逸し、且つ当時を知る古老も今は数少なくなったことから、調査は全く試行錯誤の連続だった。こうしたなかで、知床博物館に保存されている斜里町史の資料や当時の古写真、さらに古老談話などをもとに一応まとめてみた。まだ不明な部分も多く、調査を重ねなければならないものであるが、あえて中間報告とし、皆様のご批判を仰ぎ、後日補正したいと考えている。

なおこの調査には、下町の歴史に詳しい小泉昇氏より特段のご協力いただいたほか、町内在住の古老の方々からもいろいろとご教示をたまわり、心から感謝申し上げます。

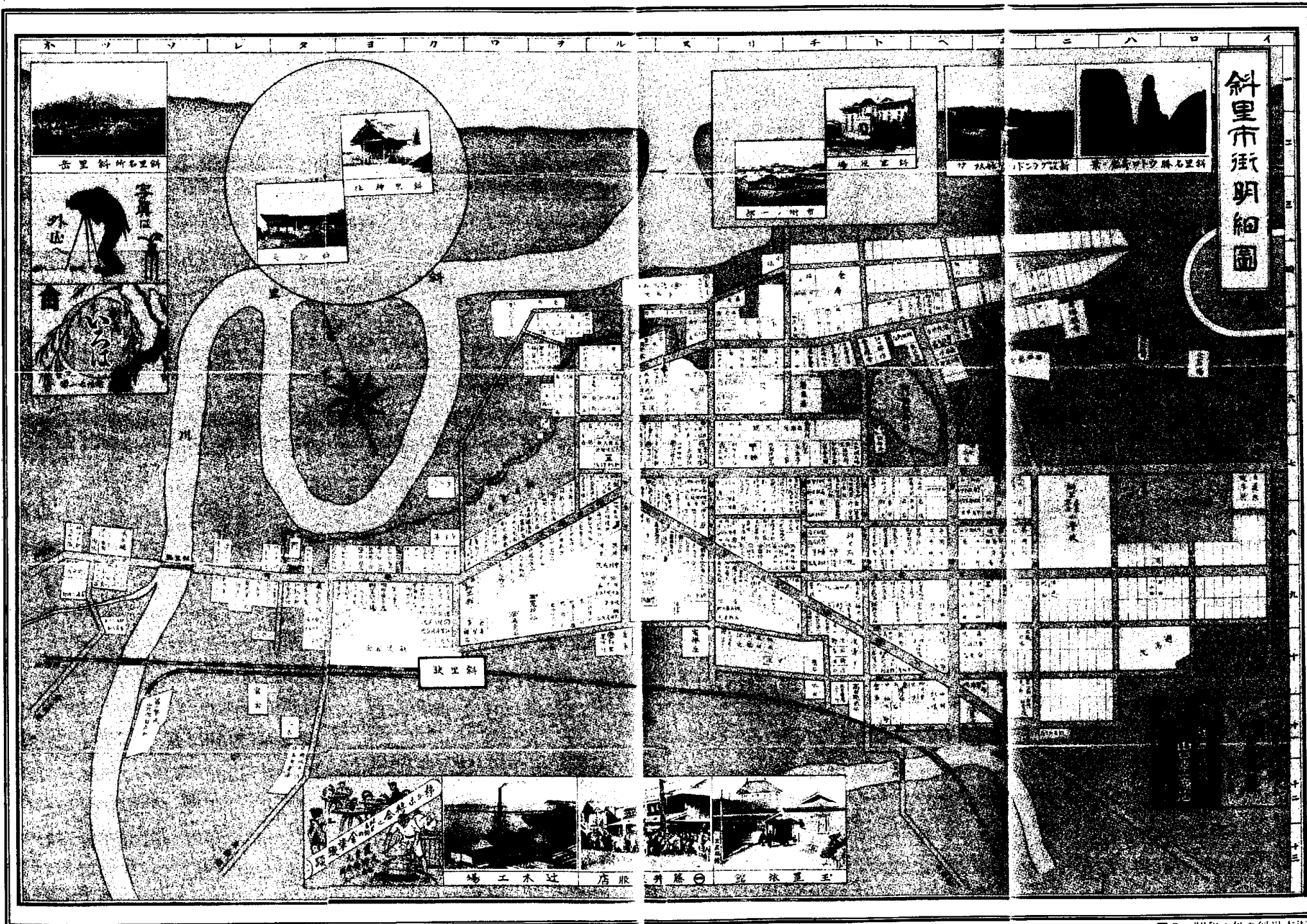


図5. 昭和4年の斜里市街図